

西粟倉村視察報告

8月6日（水）、環境省の「脱炭素先行地域」に選定された岡山県にある西粟倉村の視察に同行しました。そこでは、再生可能エネルギー設備の見学とともに、産業観光課の方から貴重なお話を聞くことができました。その概要を報告します。

1. なぜこのような取り組みが必要なのか

西粟倉村は、岡山県北東端に位置する人口1,300人程の小さな町で、土地の90%以上がスギやヒノキで覆われています。また高齢化も進行し、10代から40代の女性の転出率が高いという特徴を持ちます。このように人口水準の維持を目標にする、一見どこにでもあるような村に見えますが、この村は「奇跡の村」と呼ばれることになりました。

かつて林業を中心とする村でしたが、財源不足や産業の不況により山は荒廃していました。2004年には「平成の大合併」を拒否し、自立の道を選びます。そして転機となったのが、2008年に掲げられた「100年の森林構想」です。これは50年後の森林保全を目標に、持続可能な地域づくりを進めるプロジェクトで、木材の利活用や一次産業の再生、地域とのつながりを重視しています。実際、村役場や保育園などの公共建築物には木材が活用され、木造特有の温かみを感じられる空間が広がっています。<写真1>

また、ローカルベンチャーの支援にも力を入れており、現在では60社以上が誕生し、雇用の創出や地域経済の活性化に大きく貢献しています。その結果、西粟倉村は環境に配慮しつつ持続可能な発展を遂げるモデルとなりました。



<写真1>西粟倉村役場外観

2. 脱炭素化への取り組み

西粟倉村の脱炭素化事業は、国内外に影響を与える先進的な取り組みです。特に、再生可能エネルギー設備や林業機械を可能な限り国産設備を導入し、技術やノウハウを他の自治体に還元することで、循環型社会の実現を目指しているそうです。

1) 小水力発電

村内には2つの小水力発電所が稼働しています。<写真2><写真3>水量の変化に強い水車や耐震性の高い施設が特徴です。実現にはかなり長い時間を要したそうで、取水位置や標高差の調査、水利権の確認、電力会社との接続協議など、数多くの課題を乗り越える必要がありました。水力発電=ダムで多大な建設面積が必要だと考えていた私にとって、この小規模な設備は斬新で、取水川その周辺の景観もかなり美しいという印象を持ちました。小水力発電の収入が、他の再エネの導入の起爆剤になったそうです。



<写真2>小水力発電設備



<写真3>美しい取水川

2) 木質バイオマス

森林整備が行われているにもかかわらず、約3,000m³もの林地残材が課題となっていました。これを活用するために、薪ボイラー（温泉地）<写真4>、木質チップボイラー（公共施設）<写真5>、木くず焚ボイラー（燃料乾燥）など、用途に応じたシステムを導入しています。また、蓄熱システムにより必要最小限の稼働で効率的に運用し、化石燃料依存を軽減しています。ここでも国産設備を重視し、実現性・継続性・地域性を組み合わせた形で脱炭素化を進めています。



＜写真4＞薪ボイラー（約1400度の高温）



＜写真5＞チップボイラー

3. 2030年CO2排出実質ゼロへの取り組み

西粟倉村ではこのほか、バイオマス温水ヒーターや地中熱利用ヒートポンプの導入も進めています。特に地中熱システムは、地下水（約16度）を揚水し、利用後に同じ帶水層へ戻す方式です。地下水の豊富さや水質の良好さに加え、維持管理の容易さや規制の少なさが導入を後押ししました。一方で、課題も少なくありません。府内や議会での合意形成、補正予算の確保、採算性を考慮した設備投資、交付金の安定的な確保などが今後の持続性を左右します。

4. 最後に

今回、西粟倉村の視察に参加できたことは大変貴重な経験でした。大学で人権保護や格差社会の観点から環境学を学んでいる私にとって、地域資源を活かした取り組みは視野を広げるきっかけとなりました。この地域では約15年前から着実に脱炭素推進の町へと変貌を遂げており、遡ると、老朽化していた小水力発電所をリニューアルし、2013年には環境モデル都市に認定され、遂に2014年にバイオマス産業都市の認定を受けるといった長期にわたる取り組みがありました。前掲の「100年の森林構想」の流れを急

速化させるために「起業+移住」のコンセプトを重視したこと、西粟倉村が持続可能な村になった要因とも言えるでしょう。そして、特に印象に残っているは、産業観光課の職員さんが仰っていた「村の人口流入が成功するならば、国や文化を超えて外国人の移住者も積極的に受け入れていきたい」という言葉でした。私は、村のコミュニティの繋がりは強固であるものの、地元に利益を与える発展に貢献できることなら意欲的に取り入れようとする、画期的な考えが心に響きました。具体的には、小規模の村では珍しいエスニック料理を堪能できる古民家や、フランス語や英語を学べる国内留学を提供する民宿などがあり、日本と外国の文化の共存に寛容な姿勢も魅力的に感じました。地球温暖化の緩和に力を入れると共に、このような観光業の発展にも工夫を凝らしていることから、定期的に視察に行ってみたいと思いました。小規模な村でありながら再エネ自給率60%を達成し、脱炭素化を推進する姿は、綿密な計画とローカルベンチャーの発展を重視した結果だと考えます。今後、このような持続可能な地域が国内外に広がり、ノウハウを共有することは、日本を超えて世界に脱炭素化の重要性を訴える大きな力となるでしょう。

（CASAインターン生 村上友唯）



＜池で魚取りつかみ体験を行う人々＞